京都大学文学研究科 グローバル COE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」 アジア版エラスムス次世代研究者派遣・報告書

(フリガナ)	タケウチ リオ	所属(研究科、学年/職名)
氏 名	竹内 里欧	京都大学大学院人間・環境学研究科
		日本学術振興会特別研究員(PD)
	大学・研究機関・研究科名	
	Jyväskylä University (ユバスキュラ大学)	
	Faculty of Social Sciences, Department of Social Sciences and Philosophy, Unit of Political Science (社会科学学部社会科学哲学研究所)	
派遣先大学・	派遣先都市・国名	
研究機関、	Jyväskylä, Finland (ユバスキュラ、フィンランド)	
研究科・研究所	派遣期間 2010年 8月 4日 ~ 2010年 9月 15日	
	派遣先指導教員または受入研究者(複数可、主指導教員には*)	
	Prof. Pekka Korhonen (ペッカ・コルホネン教授)	
	(Jyväskylä University, Professor, Faculty of Social Sciences, Department of Social Sciences and Philosophy)	
研究テーマ (日・英)	ナショナル・アイデンティティの生成と公共圏の変容にかんする比較社会学的研究――フィンランドの歴史社会学者 Aira Kemiläinen の研究 に着目して―― (Comparative Study of Phenomena concerning Nationalism and Public Sphere)	

エラスムス派遣の研究上の成果について

今回の派遣の目的は、いまだ未解明の部分も多いフィンランドの歴史社会学者 A. Kemiläinen (1919-2006)に注目し、彼女のナショナリズムや公共圏をめぐる議論について、比較社会学的視点から検討を 行うことである。Kemiläinen とは、主にフィンランドのユバスキュラ大学を中心に研究活動を行った、特にナ ショナリズム研究において国際的に著名な歴史社会学者である。また、フィンランドにおける女性研究者の パイオニアとも位置づけられ、フィンランドのアカデミズムにおける女性学者の歴史を考える上でも重 要である。代表作とされる『Finns in the Shadow of the "Aryans"』(1998)では、人類学という新しい科学の誕生 や「アーリア人種優越論」の流布とのかかわりのもと、フィンランド社会が、「アジア」と「ヨーロッパ」の間でいかな る自画像を描きだしていったか、どのような公共圏を築いていったか、ということについて、多様な資料をもとに 知識社会学的探求が行われた。また、ユバスキュラにおいて刊行された『Nationalism: Problems concerning the Word, the Concept and Classification』(1964)では、西洋社会におけるナショナリズム思想の変遷について比較 社会学的観点から探求が行われており、高い評価を獲得している。しかし、彼女の研究については、言語上 の障壁も大きく、日本での本格的検討はいまだ立ち遅れているといわざるをえない。私は、既に2006年 頃より、本研究の準備作業及びフィンランドの研究者との連携を深める活動を行ってきた(共同研究プロジェクト 『The East and the Idea of Europe』(於ユバスキュラ大学、2006年2~12月)、Graduate School of Contemporary Asian Studies 研究助成取得(於トゥルク大学、2008年2月~2009年12月)、京都大学ユバスキュラ大学双方で の博士論文執筆(京大については 2008 年博士号取得済)など)。また、2009 年度 COE「次世代ユニット研究」 で、予備的分析を行った。これらの活動の延長線上に今回の派遣がある。行った活動及び成果は以下のとおり である。

1. 共著の執筆

Katalin Miklóssy (ヘルシンキ大学)、Pekka Korhonen (ユバスキュラ大学)等との共著『The East and the Idea of Europe』にかんして、草稿をもとに、執筆者間の意見交換及び編集作業を行った。私は「Chapter2 Invention of the West in Japan」を担当。同書は、西ヨーロッパより東にある国々(ロシア、ハンガリー、フィンランド等)における「ヨーロッパ」という概念にかんする比較歴史社会学的著作。「ヨーロッパ」という公共圏の構築や変容についての考察が深められた。2010年に Cambridge Scholars Publishing 社にて出版予定。

京都大学文学研究科 グローバル COE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

アジア版エラスムス次世代研究者派遣・報告書

2. 博士論文にかんする指導及び博士論文志願学生によるゼミ参加

ユバスキュラ大学へ提出する予定の博士論文にかんして、Pekka Korhonen 教授より指導を受けた。さらに、博士論文志願学生によるゼミ(8月27日、於ユバスキュラ大学)へ参加し、若手研究者との交流を深めた。

3. 資料収集

The National Library of Finland・ユバスキュラ大学図書館・タンペレ大学図書館等で、資料収集。

4. インタビュー

T. Tuomainen 氏(ユバスキュラ大学)とO. Päärnilä 氏(同)へ、本研究テーマについてのインタビュー(8月20日、 於ユバスキュラ大学人文科学学部)。両氏は、Kemiläinen に指導を受けた歴史研究者。

5. インタビュー

M. Hietala 教授(タンペレ大学)へ、本研究テーマについてのインタビュー(9月8日、於タンペレ大学歴史哲学研究所)。Hietala 氏は、Kemiläinen とともに『Mongoleja vai germaaneja?』を執筆している。

6. 国際ワークショップ

Publishing Your Research Abroad: Possibilities and Challenges (8月30日のみ、於ユバスキュラ大学人文科学学部)への参加。国際ジャーナル・国際学会での発表にかんするワークショップ。J. Ojala 教授(ユバスキュラ大学)等を中心とする。滞在中に開催をうかがい、参加者の御厚意により参加を許可していただいた。

7. 国際学会

Nordic Association of Japanese and Korean Studies2010(8月19日のみ、於ヘルシンキ)への参加。後、本学会開催の中心人物である岩竹美加子教授(ヘルシンキ大学)より、フィンランドと日本の比較研究について、Kemiläinen について、詳しくお話を伺った。

URL http://www.najaks.org/

8. 国際学会

Power & Knowledge (9月 6-7 日、於タンペレ)への参加。

(GCOE ワーキングペーパー)が、まもなく刊行される。

URL http://www.uta.fi/laitokset/isss/tamcess/sovako/power2010/

9. フィンランド語コース受講及び単位取得

Helsingin seudun kesäyliopisto にて、フィンランド語コース(8月16日~9月2日。他の活動との関係から、部分的参加) 受講及び単位取得。(evaluation: kiitettävä)

今回の滞在では研究テーマを掘り下げるとともに、フィンランドの研究者との交流・比較社会学的視点の深化も重視した。特に、ユバスキュラ大学、タンペレ大学で行った、Kemiläinen とともに研究を行っていた研究者へのインタビューは、書物を通じて得ていたイメージに豊かな肉付けを与えられ、貴重な機会となった。Kemiläinen 及び Hietala の研究からは、近代フィンランド社会において「ヨーロッパ」という公共圏への参入が重要なトピックとなる中で、「科学的」手段や「身体」のイメージ(身体測定調査、「ミス・ヨーロッパ」の宣伝等)を駆使し「ヨーロッパ」という公共圏への所属の証明が論じられる傾向があったことが明らかになる。こうした現象は、比較社会学的見地からすると、「文明」への帰属を証明するにあたって(例えば新渡戸の『武士道』にみられるように)「精神性の相似」に頼らざるを得なかった近代日本社会と対照的なものを含む。また、インタビュー及び Kemiläinen の目記等の資料からは、Kemiläinen の研究についてしばしば指摘されるジェンダー的視点の弱さにかんして、やや逆説的な推論―女性研究者の「パイオニア」であるが故に、ジェンダー的感受性を研究に投影することを「封印」した――が浮かび上がる。今後考察を深めたい。なお、本 COE より、<u>拙稿「フィンランドにおけるナショナル・アイデンティティの</u>構築と公共圏の再編―― A. Kemiläinen のナショナリズム論の検討を中心に――」

末尾になりますが、貴重な研究の機会を提供してくださった COE プログラム、受入を快く承諾してくださった Korhonen 教授、その他お世話になった多くの方々に深く感謝申し上げます。